

「JNDC ニュース」刊行継続によせて

小川 岩雄 (立教大学)

わが国の原子力研究が発足してから十年余りになる。その間の発展の速さには、ある意味ではめざましいものがあるが、だからといって日本が(平和利用一本やりという理念や安全性についての認識を除いては)米英ソ仏などの先進国をリードできるほどの状態になったとはとてもいえない。日本の科学技術全体に共通する根の浅い後進的な性格が、原子力の場合にも、いろいろな形でしこくつきまとっているように思われる。

核データの収集・評価の作業を進める上で、シグマ委員会の方々が大変な努力を払わなければならないのも、ひとつにはこういう事情のためのものである。大体、原子力の開発とは外国から次々と新しい原子炉を買い入れることだ、ぐらゐにしか思っていない業界や政府のおえら方にとっては核データなどというものは何の興味もない無用の長物だろう。それほどではなく、もう少し開けた考え方の資本家やお役人、工学者で、国産炉の開発に熱心な人たちでも、核データの国産まではなかなか本気で考えようとはせず、アメリカあたりの虎の巻にしがみついているさえすれば何とかなる、ぐらゐにしか思っていない向きが少なくないようである。

それならば、平素から原子力問題に何かと文句の多い基礎科学者、ことに原子核物理学者はどうであろうか。残念ながら、実はここにもまた別の形の後進性が根深く支配している。外国のデータだけしか相手にしない多くの理論家、欧米の論文首っ引きの高級“学生実験”が国際的流行のムードに乗って大手でまかり通る研究所、測定器の地道な開発や中性子物理学のように一見どろ臭いが工学的応用につながる研究や教育が、“純粹”核物理にくらべて何かと軽視され勝ちな大学の物理教育の貴族的アカデミズム。こういう風潮と体制の中では、原子力で要求される核データの収集・評価というような地味で労苦の多い仕事に専念しようとする若手など育つはずがない。シグマ委員会がいくら声をからして呼びかけたところで、所せんは、現役から退いたロートルの隠居仕事か、または義理でかっこうだけつけておく片手間仕事以上の協力は得られないであろう。

工業界と、基礎分野の学界との間のこの奇妙な分極状態からは、わが国独自の重厚な基礎研究に根ざした原子力の本格的発展はとうてい期待できない。この壁を何とかして突破しようというシグマ委員会の闘志には心から脱帽を惜しまないが、その前途は多難をきわめるであろう。この「ニュース」の継続刊行がその困難の解決に少しでも役立つことを念願してやまない。